

英語学習における音読について (1)

石原 敬子

はじめに

「語学留学をしたい」「好きな映画を英語で観ることができるようになりたい」「海外旅行時の入国審査を難なくクリアしたい」

「TOEIC の点数を上げたい」「日本語訳で読んだ本を原作で読んでみたい」「英語の歌をカッコよく歌いたい」などという英語に関する具体的な希望を持ち、そのための勉強方法についてアドバイスを求める学習者が居る。さらに「英語ができるようになりたい」という漠然とした希望を持ってアドバイスを求めに来る者も多い。当然のことながら、それぞれの学習者の希望する内容やその時点での英語力、モチベーションの度合い等によって、指導の仕方は異なってくるが、それに加え、筆者自身の英語学習過程や文献等で得た情報から、どのような場合も英語の音読を勧め、指導している。音読が英語力向上に効果をもたらす学習方法であることを客観的に論じることを目的とし、本論文はその第一弾として文字の意味、音の意味について考察する。

1. 文字

「ことばは本質的には音声」(オング, 160)であり、文字はことばを記号で表記したものである。その「『記号 sign』という語のもとになった〔ラテン語の〕『シグナム signum』は、ローマ軍の部隊がそれぞれの隊をひと目で見分けるために高くかかげた軍旗のことであり、語源的には『ひとがそれにつき従うもの』を意味した」と言う(同上, 160)。人が進んでいくために必要なもの、ということであろうか。

文字は「人類の文化をきずき、歴史を記録し、私たちの祖先の生き方をもつたえて」(杉

藤, 3)きた。元は動物や物が簡略化して描かれた絵文字(ピクトグラム)であり、それが簡略化されたり、線や点で作られた記号である。各言語が持つ文字の種類や数はさまざまであるが、大きく2種類に分けると、文字そのものが何らかの意味を表す表意文字と文字が発音を表す表音文字とがある。

日本語の中で使用している漢字は古代に中国から取り入れたものであるが、もともと物をかたどった象形文字からきており、「漢字を見ればただちに意味が推測できる」(川島・安達, 146)。すなわちそれぞれの漢字が意味を持つ表意文字である。そして漢字を簡略化して作られたひらがな、西洋文化の流入と共にそれらを表現するために漢字の一部を用いて作られたカタカナは、それぞれ一文字では意味を持たず発音のみを示す表音文字である。現代はアルファベットをそのまま文中で使用する場合もあり、日本語は一つの言語でありながら種々の文字を必要に応じて使い分け、文字表現の豊かな言語だと言える。

「じかにその物をイメージ化」させる漢字の例、また音声とつながりの深いひらがなの例として、杉藤氏は「羊」という漢字や谷川俊太郎氏の詩の題名「はなのののはな」を挙げている(杉藤, 3)。「羊」という漢字を見れば「角のはえたあの『羊』がみえてくる」し、逆に「はなのののはな」では一見訳が分からず一文字ずつ声に出してみる作業をする人もいるだろう。「花野の野の花」とすれば声に出して読まずともその意味が分かる。

文字の興味深い点は、それ自体が音を発するものではないにもかかわらず、音を表すことができるのである。音声特有の他の要素である、強調や大声ですら傍点や括弧、感嘆符

を用いて表すことができ、「疑問文の尻上がり音調は疑問符を用いる」（「文字」『ウィキペディア』）と表現ができる。さらに「とぎれとぎれの発言はリーダー（……）やダッシュ（—）で」（同上）表すことが可能である。言語音声の特徴のうち文字で表現することが難しいのは、発話の速度や抑揚程度であろう。

文字を使うようになって、人間の世界はどのように変わっただろうか。書物を多く読み、書くことによって語彙が増え、自分が属する世界以外の世界について知ることが可能になった。それらの未知の情報をさらに伝えることが可能になった。また知らない世界について想像する力を高め、「思索を深める」（杉藤, 3）機会を得た。また「文字言語は筆記用具などの伝達道具を必要とし、またある程度の期間保存されるため、時間的にも距離的にも隔たった相手との間接的伝達を可能にする」（「文字」『ウィキペディア』）。オング氏は、文字の文化において、人間は「書くことを非常に深く内面化しそれを自分自身の一部にして」（オング, 172）いると言う。文字を介して人間のコミュニケーションの取り方が変化しただけでなく、文化、知識その他さまざまな面で人間性を深める役割を担っていると言える。

2. 音声

人間が発する「音の一つ一つは、普通意味をなさないが、個々の音の組み合わせによって単語をつくり、それをまた組み合わせで文をつくり、こうして音の組み合わせが無限の表現力をも」つ（杉藤, 2）。しかし音声は人の口から発せられた瞬間に過去のものとして跡形も無く消えていく。従って、記憶を頼りに内容や似た発話を再現することは可能であっても、ある人の発話を100%同様に再現することは、他の人にはもちろん、本人にとっても不可能に近い。このため音声は、話し手と聞き手がコミュニケーションの場を共有する直

接的伝達に用いられることが多い。

かつて家族や同じ村・町の人々で共有する時間が多かった頃、「信仰、価値観、事実といったものがすべて口伝えにされ、人の記憶の中にのみ蓄えられていた」（カーブ, 206）。口伝えで長い年月を経ても後世に伝えていくことが可能であったのは、人々の共有する時間だけでなく、共有する場所の広さ（狭さ）やその他の要素が関係するであろう。

その他の要素として考えられるのは、オング氏の言う人間の音声の持つ力である。「音声は、力を使わなければ、音としてひびくことができない。……（中略）……すべての音声、とりわけ口頭での発話は、生体の内部から発するのであるから、『力動的(dynamic)』（オング, 74）であると言う。この考え方は、古代、ことばには不思議な力が宿り、人の口から出たことば通りのことが実際に起こるとして、言霊が信じられていたこととも関係があるであろう。

「発話は、生体の内部から発する」（オング, 74；傍点筆者）ダイナミックなものである。そして1章で述べたとおり、人間は「書くことを非常に深く内面化しそれを自分自身の一部にして」（オング, 172；傍点筆者）きた。ことばを使うことが人間の生物学的な内部、精神的な内面と大きく関係している、ということである。

人はことばを介して他の人とコミュニケーションを図るだけでなく、さまざまな知識を得ることができるわけであるが、「知っているというのは、思い出せるということである」（オング, 76）。そして「思い出す」という意味を表す英語の語彙の一つに“recall”[re(元)+call(呼ぶ)]がある、という点も興味深い。日本語においても「思い出す」は「(記憶を)呼び起こす」と言い換えることができる。記憶することに音声が無関係ではない、ということを示唆するのではないだろうか。

最近でこそオーラル重視の傾向があるが、日本の国語教育、外国語教育においては「文字言語が重視され、話しことばによる音声言語は軽くみられ」、「沈黙が美德」(杉藤, 3)とされた時代が長くあった。しかし、人間のことばの獲得の過程をみると、「音声言語(聞く、話すことば)の獲得のあとに、文字(書字)言語(読む、書くことば)の獲得が起こる」(川島・安達, 70)ことは周知の事実である。さらに世界に6,000余あると言われる言語の中に文字を持たない言語は多数存在するが、音声を持たない言語は一つも存在しない、という事実からも、音声が言語を考える上で基本となる重要な要素であることは論を待たない。

まとめ

本論文では文献を基に1章で文字の意味、2章で音声の意味を探り、いずれも人間が生きていく上で優劣無く大切なものであることが分かった。しかし冒頭で述べた通り「ことばは本質的には音声」(オング, 160)であり、子どものことばの獲得過程を見ると、「ごっこ遊び」のように、最初は意味がわからなくても、繰り返し聞き、まねているうちに、自然に意味がわかってくる(川島・安達, 113)。「その不思議な響きがいつの間にか耳に残り、脳に刻まれていく」(同上, 115)のである。次回の論文において「意味のない音のつらなりが、いつの間にか『ことば』のつらなりとして意味を示しはじめる」(同上, 201)過程、どのような学習方法が脳のそれぞれの領域を活性化させ、いかに脳を効率よく使うことができるのか、音声が脳にどのような刺激を与えるのか、いかに「言語を自分の体の中へ取り込む、すなわち内在化させる」(國弘・千田, 23)ことができるか、という脳神経科学の分野からの考察を中心に、音読が英語力向上に効果をもたらす学習方法であることを立証する。

参考文献

- [1] オング, W-J 著, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳 (1991)『声の文化と文字の文化』, 藤原書店.
- [2] カーブ, アン著, 梶山あゆみ訳 (2008)『「声」の秘密』, 草思社.
- [3] 川島隆太, 安達忠夫 (2004),『脳と音読』, 講談社現代新書.
- [4] 國弘正雄, 千田潤一 (2001),『英会話・ぜったい音読・挑戦編』, 講談社.
- [5] 杉藤美代子 (1996),『声にだして読もう! 一朗読を科学する一』, 明治書院.
- [6] 「文字」『ウィキペディア』
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E5%AD%97> (2010年10月末取得)

